

1. 会長挨拶
2. 2026 年度全国大会のお知らせ
3. 2026 年度総会のお知らせ
4. 懇親会のお知らせ

会 長 挨 拶

竹村 はるみ

会員の皆様におかれましては、つつがなくお過ごしでしょうか。熊本地震の報に接し、被災された方々、また不便な生活を強いられている方々にお見舞い申し上げます。

大学では、今はちょうど成績評価を行う時期です。成績評価と言えば、今年度はちょっとした興味深い現象がありました。AI の普及に伴い、レポートに代わって旧式の試験が静かに復活しているようなのです。実際私も、担当する授業のいくつかで、一切の端末の使用を禁止したアナログ式の形態で試験を実施しました。ただし、そこにまったく葛藤がないわけではありませんでした。最大の葛藤は、私自身がペンと紙だけで文章を作成することがもはや無理な状態になっているにもかかわらず、それを学生に強いているというジレンマでした。

思い起こせば、中学・高校での提出物はもちろんのこと、大学の学部低回生時のレポートも、手書きで原稿用紙に執筆していました。ところが、3、4 回生あたりでそれが一変し、卒業論文は NEC のワープロ文豪 mini で、修士論文は Mac の SE30 で執筆しました。修士論文口頭試問では、機械好きだった岡照雄先生がフォントの美しさを開口一番褒めて下さったのも懐かしい思い出です。それ以来、発表原稿、論文、授業の資料、講義ノート全てを PC で作成する日々を送るうちに、いつしか PC への依存度は高まり、今やプライベートな手紙を書くにも、まずは PC で下書きを作成してから葉書や便箋に清書する始末です。この会長挨拶にしても、もちろん PC 画面に向かってキーを叩いているわけです。書き直しや挿入が自由自在にできる PC を取り上げられて、その代わりに紙とペンだけを与えられたら、きっと私が書くものは内容も文体も目も当てられないほど劣化するに違いありません。そもそもひどい悪筆なので、自分が書いた醜悪な文字を見ているだけでげんなりし、書く気力すら失いそうな気がします。

私がそんなことを考えながら試験監督をし、必死でペンと消しゴムを動かす学生に内心詫びていたとは、当の学生達には想像もつかなかったでしょう。ワープロが害とは言えないように、AI も一概に害ではなかりょうに、と思う自分もいます。印刷技術が文学の流通のみならずコンテンツにも大きな変化をもたらしたように、文を書くという行為とテクノロジーの深い関係に複雑な思いを致す今日この頃です。

そんなこんなな懊悩も共有できる貴重な機会が、学会や研究会です。9 月 12 日（土）に青山学院大学にて開催される全国大会にて、皆様にお目にかかれまことを楽しみに致しております。

2026 年度全国大会（第 15 回）および総会のお知らせ

全国大会および総会を青山学院大学 青山キャンパスにて開催いたします。

日時：2026 年 9 月 12 日（土） 14 時 00 分～17 時 00 分

場所：青山学院大学 青山キャンパス 17 号館 3 階 17306 教室

アクセスマップ：<https://www.aoyama.ac.jp/outline/campus/access.html>

キャンパスマップ：<https://www.aoyama.ac.jp/outline/campus/aoyama.html>

全国大会（第 15 回）プログラム

【開会のあいさつ（14:00～14:05）】

会長：竹村 はるみ

【研究発表（14:05～16:15）】

1. 14:05～14:45

司会：川田 潤（東北支部）

解体される台詞、構築される目録——17 世紀中葉における戯曲テキストの再編成

佐々木 和貴

2. 14:50～15:30

司会：伊澤 高志（東京支部）

「ロミオなんて dishclout」——古布を読み直す

瀧澤 英子

3. 15:35～16:15

司会：廣野 允紀（関西支部）

ミルトンの初期小作品における花

金崎 八重

【閉会のあいさつ（16:15～16:20）】

事務局長：笹川 渉

研究発表要旨

解体される台詞、構築される目録——17 世紀中葉における戯曲テキストの再編成

佐々木 和貴（東北支部）

1642 年の内乱勃発に伴う劇場閉鎖を契機として、演劇は劇場で「体験」する機会が激減し、個人的に「読む」対象として広く流通するようになった。本発表では、この過渡期に刊行された John Cotgrave 編のアンソロジー *English Treasury of Wit and Language* (1655) と、Francis Kirkman による戯曲カタログ (1661・1671) に焦点を当てる。

前者が個々の劇作品を分解し、読者が台詞を収集・再利用可能なテキスト単位としてパッケージ化したのに対し、後者はそれらの作品を作者・題名・ジャンルなどの書誌的属性によって分類し、購買者が選択・消費できる目録を構築した。すなわち、Cotgrave が戯曲の「内部」を商品化したとすれば、Kirkman は戯曲の「集合」を商品化したといえるだろう。

前者の台詞の選定基準と後者の分類方法（およびその変遷）を具体的に分析することで、一過性の上演芸術であった演劇テキストが、検索・収集・所有の対象となる「書物」へと再編成される過程を明らかにする。さらに、このような出版メディアの働きが、内乱による断絶を経て再生する王政復古期演劇文化にいかなる役割を果たしたのかを考察する。

瀧澤 英子（東京支部）

『ロミオとジュリエット』第3幕5場において、乳母が放つ「ロミオなんて dishclout」という台詞を論じる。従来、この dishclout は追放処分の身となったロミオを、ジュリエットにはもはやふさわしくない相手と断じる、粗略な謗言として見なされてきた。本発表は、同語を「古さ」、すなわち新旧交替が望まれるもののメタファーとして再検討するものである。語義の裏付けとして、同時代文献の用例に加え、古布の文化史を参照し、問題の台詞が、ロミオの存在が「古く」なったことを告げるものと解釈する。

さらに、dishclout に表される「古さ」の帯びる矛盾にも目を向ける。「ロミオなんて dishclout」と述べた乳母本人やその他の年配者に体现される「古い」、戯曲内で繁く話題となる「古び」のイメージ、そして、「古い」と見なすものに対して若者たちが示す両面的な態度を検証し、「古さ」がそれに相対する「新しさ」といかなる関係の上に描かれているかを考察する。「古さ」と「新しさ」が明快な二項対立を成さず、作中の時間的展開とどのように交錯しているかを整理しながら、本作において「古さ」が果たす役割について見解を示す。

ミルトンの初期小作品における花

金崎 八重（関西支部）

ミルトンがケンブリッジ大学在学中に書いた英詩は、宗教詩として評価の高い『キリスト降誕の朝に』を例外として、十数行から70行程度の短詩で完成度もそれほど高くなく、ギリシャ・ローマ牧歌や他のルネッサンス詩の影響が強すぎることから、概ね習作という評価で、あまり着目されてこなかった。ただ、ミルトンの詩作の変化という観点から考えると、いくつか注目すべき作品がある。

ミルトンは、後期作品で顕著だが、美しいものや人を表現する際に、バラやスマレ、ジャスミンなどの様々な花をカタログ的に並べる傾向がある。ケンブリッジ時代の作品にもその片鱗が見て取れる。哀歌『咳が死因となった美しい幼児の死について』や、牧歌『五月の朝の歌』など、初期小作品に描かれる primrose や cowslip、hyacinth といった花の用いられ方を、大学卒業以降の詩や後期作品と比較しつつ論じる。

2026 年度総会総次第 (16 時 25 分～17 時 00 分)

【報告事項】

1. 各支部活動報告
2. 編集委員会報告
3. 2025 年度会計報告 (資料は当日配布)
4. 日本学術会議協力学術研究団体加盟について
5. その他

【審議事項】

1. 『十七世紀英文学会機関誌』投稿規定 (案) について
2. 十七世紀英文学会規約改正 (案) について
3. その他

懇親会のお知らせ

日時：2026 年 9 月 12 日 (土) 17 時 30 分～19 時 30 分

場所：restaurant filia

東京都渋谷区渋谷 4-4-25 アイビーホール 1 階 Tel: 03-3409-8186 (<https://www.filia-aoyama.com>)

参加費：6,000 円

懇親会出席のご希望は **8 月 31 日 (月)** まで各支部事務局にご連絡ください。

* 本部事務局：笹川 渉

* 本部会計：大久保 友博

* 東北支部事務局：川田 潤

* 東京支部事務局：伊澤 高志

* 関西支部事務局：廣野 允紀

* 学会ホームページ委員：柴田 尚子